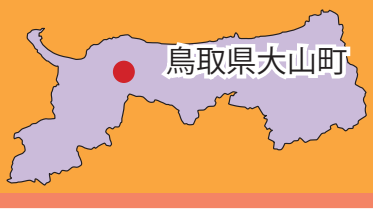
自然石を使った
日本一長い参道

大山寺参道の石畳



中国地方の最高峰である大山は、その崇高さゆえに人々の信仰心を高めたともいえます。この大山への信仰は備中・備前・備後にまで及び、人々が大山へ向かう道は「大山道」と呼ばれました。平安時代、大山寺の基好（きこう）上人が「大山の地蔵菩薩は牛馬の守護神」と唱え、全国に護符を配って宣伝しました。天台宗の大山寺は阿弥陀信仰が中心でしたが、山岳修行僧による智妙大権現（ちみょうだいごんげん）の名によって地蔵菩薩信仰が付け加えられたようです。今も山中の道端には、大日如来碑が牛馬供養塔としてたたずんでいます。

牛馬を連れた大山参拝が多くなるにつれて、大山寺付近の広大な草地で牛馬市が開催されるようになりました。その後、享保 11 年（1726）頃から山奉行吉川宇平太によって改革が始まると組織や制度が整えられ、大山博労座が整備されました。当時、福島の白河馬市、広島久井の牛市と並び日本三大市場の一つとされ、昭和 12（1937）年までこの場所で牛馬の取引が行われました。

大山につながる道は米子・出雲・隠岐からの尾高道、淀江や御来屋からの坊領道、倉吉からの参詣者が通った川床道、そして出雲街道の溝口宿と大山寺をつなぐ溝口道は、桝水別れで作州や江尾からの横手道に合流します。これらの道は牛馬を曳いた博労が通った参詣の道でもあるのです。

■位置図

こうした参詣道のなかに、大山寺入り口から大神山神社奥宮まで、約 700 m にわたって続く参道があります。別名「御幸参道」とも呼ばれるこの道は日本一長い石畳の道で大山の象徴といえます。寛政年間（1789 ～ 1800）にその原型ができたといわれ、杉木立の続く並木の両側には、中門院派の僧坊跡があり、その右側に江戸期の磨崖「吉持地蔵」が鎮座しています。参道の途中には人々が喉をうるおしたであろう湧水「延命長寿の御神水」があり、その奥に博労座から移築された銅鳥居を抜けると奥宮の神門を仰ぎ見ることができます。

こうした大山道のなかでも、特に川床から地蔵峠までの川床道、大山寺から升水高原、三坂峠の横手道、大野池入り口から種原入口までの坊領道が歴史の道に選定されています。

大神山神社奥宮へ続く自然石（延長 700m ）の石畳道。

川床道の石畳。

横手道には、一町（約 109 m）ごとに地蔵石像が置かれた。地蔵信仰に基づく他界信仰によって山陽筋の人々による寄進。

大山寺本堂